

# 「後期幕府直轄時代」について(6-2)

今回もオムシャ及び目見礼について見てゆきます。

米の採れない松前藩は、

初めて上級家臣にアイヌとの交易の場（商場）を与えた。

年1回自ら船を仕立てて直接交易を行つていましたが、

17世紀末には商人による請負經營（場所請負制）が明確になつてきたとされ、漁業經營の場という性格が強くなります。

交易の拠点であつた運上屋も、場所請負制では漁業經營の管理拠点となり、場所請負人は、支配人・通辞・帳役を詰めさせ、生産性の向上を使役するアイヌ民族に求め、春のニシン漁や秋の鮭漁などで、次第に酷使するようになります。

## オムシャの内容

まず、碇書きを読み聞かせます。異国船や見慣れぬ船を見たら直ちに申し出るこことや、蝦夷産物の増産や、

田見札はウイマムから発したものとされ、そもそもアイヌ民族が松前藩主に対する目見得の儀礼でした。年代・作者とも不詳ですが、下図は藩主の目見得の状況

## 藩主の目見札

福山館、福山城、松前・箱館奉行所で行われた、田見礼について見てゆきます。

次に、同様の儀式として又や表彰者に限られていましたが、嘉永2年には、15歳以上のすべてのアイヌに与えられました。

それ品物は、初めは役アイヌや、役料の下賜、善行者への褒賞を行い、老病者・一

これから始まる鮭漁に精を出すことなどが記され、通辞を経て全アイヌに申し渡されました。

そして、役アイヌの任免や、役料の下賜、善行者への褒賞を行い、老病者・一

で、大書院の上段の間には藩主が座し、大広間には上級家臣が両側に3名ずつ座っています。

その中央にアイヌに給される品々が並び、末席には山丹服で正装した役アイヌが座して、その前を、侍に導かれ、手をつなぎ（アイヌ民族の貴人を訪れる時の礼儀）正装したアイヌが進み出ようとします。

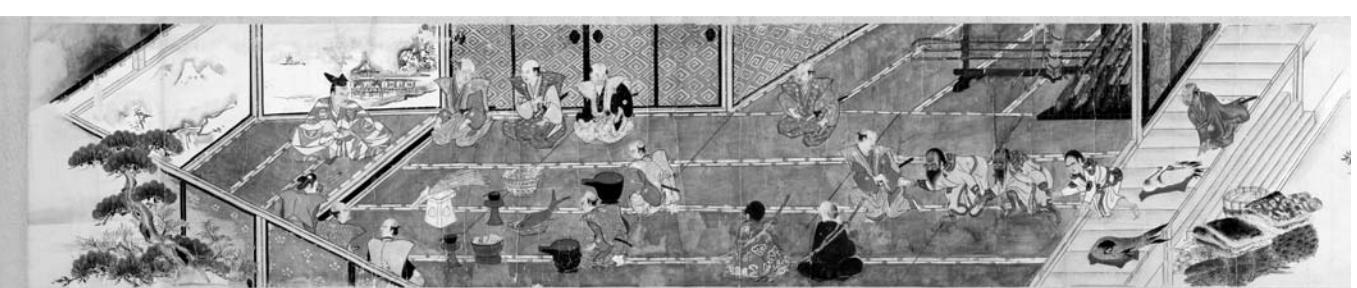
大広間の脇には武器が飾られ、縁にはアイヌ民族からの献上品である鶴と臘肉（せいが、その下には干鮭・干鰐・串鮑・海獸の毛皮・苦（敷き物））が見えます。

用意が整うと、各場所からの献上物を正面に置き、役アイヌを奉行の前で一人ひとり披露し、着座が終わると申し渡し書を読み聞かせます。

通辞がこれを通訳し終わると、一同に酒を賜り、奉行が退座した後、一汁一菜（の膳をアイヌ一同に賜り、終わつて武器の飾りを見、玄関で領主よりの下賜品を受け、その後奉行所内の三ノ丸、台場等や、調練場を見学させました。

アイヌからの献上品は、多くは苦・匙・細工広蓋・糸巻・半月盆など蝦夷細工と呼ばれるもので、これに対する下賜品は、更紗綿入羽織・台杯（天目台と木椀）・煙草・煙管・酒などがありました。

## 奉行所での目見札



『蝦夷國風図絵』函館市中央図書館蔵